

瓜姫とアマンジャク・仁多郡奥出雲町大呂

令和4年2月22日

収録・解説・酒井 董美^{たによし} イラスト・福本 隆男語り手 安部イトさん（明治27年生まれ）
収録・昭和45年7月27日

あらすじ

とんとん昔があつたげな。じいさんは山へ木樵りに、ばあさんも川へ洗濯に行つたげなら、川上から瓜が流れてきたげなで、拾つて食べたらたいへんにうまかつたので、^へも、ひとつ流れりや、[、]じいさんの土産と言つていたら、また流れてきた。「今日は瓜が流れてきた。持つてもどつてああけにあれ食わあや」

瓜を包丁で切ろうとしたら、中から女の子が生まれたげな。じいさんやばあさんは、子どもがなかつたので喜んで、瓜姫いい名につけて育てたげな。

その娘さんが大きくなつて、

^へ、じいさん サイがない
ばばさん クダがない

と機を織るようになった。^{はた}ある日、じいさんとばあさんが、^へ木樵り行くけん、瓜姫は機を織つて留守番しちよれよ。

何が来ても戸を開けんよ」隣にアマンジャクという恐ろしい者がおつて、それがやつて来て、
「瓜姫さん、ここ開けてござだわ」

あんまりアマンジャクがせがむので、手の入るだけ開けたら、今度はアマンジャクはガラーツと開けて、
「あすこの柿取つて食わあやあ」

アマンジャクは瓜姫にぼろの着物を着せ、自分がいい着物を着て柿の木に登つて自分が柿を食へては、

^へそう そう そう 瓜姫さん シイタン(芯)ばつつかあ

そう そう そう 瓜姫さん サネ(核)ばつかあ

と、瓜姫には芯や核ばかりで、自分はよい実を食へ、瓜姫を柿の木に縛りつけ、アマンジャクは瓜姫の家に帰つて戸を閉めてしまつて、
^へじいさん サイがない
ばばさん クダがない

と機を織つていたげな。「瓜姫や、もどつたずよ」「はい、はい、お帰りなさい」。しかし、じいさんとばあさんはアマンジャクの正体を見破

つた。アマンジャクも観念して、「あんな柿の木にござあ」と答えたげな。

じいさんとばあさんは、瓜姫を下ろしてやつたげな。
そうして、

「アマンジャク。承知せんけん」と怒つたじいさんとばあさんはアマンジャクを殺して、アマンジャクの脚はカヤの山へ投げ、それから手の方はソバ山のソバ畑へ投げたところが、アマンジャクの血が出てそれらについたので、いまでもカヤを刈ると中が赤色になって、血のような色をしています。また、ソバの脚も赤いのです。これもアマンジャクの血に染まつたので、あのような赤い色になつたという話だげな。で、昔、こつぽり。

解説

桃太郎が男の子であるのに呼応するように瓜姫は女の子の話である。筆者が鳥上中学校に勤めていた時分、よく生徒たちと昔話をうかがいにかけたものであり、この話もその一つである。

この瓜姫とアマンジャクの話は、稲田浩二『日本昔話通観』では、「むかし語り」の中の「誕生」に戸籍がある。（元島根大学法文学部教授）

